令和7年度版「学力向上ポートフォリオ（学校版）」【原山中学校】

① 今年度の課題と学力向上策

	学習上・指導上の課題		学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	＜学習上の課題＞ 基礎的・基本的な知識・技能の習得状況が十分な生徒と不十分な生徒でご極化している傾向にある。 ＜指導上の課題＞ 生徒一人ひとりの知識・技能の習得状況に応じた個別最適な学びの場面を設定した授業づくりをする必要がある。	⇒	思考・判断・表現等の学習の過程を通して習得した知識・技能を、他の学習や生活の場面でも活用できるような学びの場面を設定する。【適宜】 生徒自身が最適な学習方法を決定できるように、協同学習やワーク、スタディサプリなど、生徒が選択できる学習形態を増やす。【適宜】
思考・判断・表現	＜学習上の課題＞ 学習課題を解決するために、新たに身に付けた知識・技能や既習事項を活用し、粘り強く試行錯誤することに課題がみられる。 ＜指導上の課題＞ 教科横断的な視点も加え、生徒が思考・判断・表現する場面を効果的に設定した授業づくりに注力する必要がある。	⇒	各教科等の授業において、生徒が自分自身の考えをまとめ、発表したりする場面や、級友と意見を交わしながら学習を進める必要のあるような学習活動を設定する。【適宜】 生徒自身が学習のゴールを意識して学習計画を立てたり、学習方法を決めたりする場面などの個別最適な学びの場面を設定し、必要感をもって取り組むことができるような授業づくりを行う。【適宜】

② 全国学力・学習状況調査結果について（分析・考察）

知識・技能	国語・数学どちらの教科においても、埼玉県平均や全国平均に比べて、正答率は高く、無回答率は低い傾向にあった。基礎的・基本的な知識・技能の習得に向けて個別最適な学びが進んでいるといえる。しかし、調査結果概況の正答率分布グラフを参照すると、二双の山になっている。このことから、当初の課題に挙げたような、知識・技能の習得状況の二極化が生まれていることがわかる。
思考・判断・表現	国語・数学どちらの教科も、「知識・技能」の項目と比較して、正答率が低く、また無回答率が高くなる傾向にあった。ただし、全国平均の正答率と比較すると、国語は4ポイント、数学は10ポイント上回っている。また、選択式問題の本校正答率と全国正答率の差が3ポイントであるのに対し、短文式、記述式問題の正答率の差は5～10ポイントであることから、習得した知識・技能を表現する資質・能力が身に付いているといえる。

③

	中間期報告		中間期見直し
	評価（※）	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	B	授業改善を図り、探究的で個別最適な学びの実践に努めている。	変更なし
思考・判断・表現	B	教科ごとに指導計画の見直しを定期的に行い、自分自身の考えをまとめ、発表したりする場面や級友と意見を交わしながら学習を進める必要のある学習活動の設定に努めている。	変更なし

※評価　A 8割以上（達成）B 6割以上（おおむね達成）C 6割未満（あと一歩）

④ さいたま市学習状況調査結果について（分析・考察）

知識・技能	どの教科においても、正答率が市平均を下回るはことはなかったため、知識・技能の習得状況としては概ね良いといえる。しかし、数学では、無回答率が平均よりも0.1ポイント高かった。授業では、既習事項を確認したり、繰り返し学習させたりして、さらなる定着を図っていく。また、知識の概念的な理解を大切にして、生徒が知識・技能を獲得していけるよう授業改善に努めていく。
思考・判断・表現	知識・技能と同様に、どの教科においても、正答率が市平均を下回ることはなかった。また、無答率も低い。これは、各教科の授業のなかで、思考・判断・表現する場面を意図的に設け、生徒に自分の考えをもたせ、それを伝え合う指導を積み重ねた成果である。今後は話し合いや交流場面の設定の幅を広げ、生徒が目的に応じた協働ができるようにしていきたい。

⑤ 学力向上策の実施状況

	評価（※）	
知識・技能	B	思考・判断・表現等の学習の過程を通して習得した知識・技能を、他の学習や生活の場面でも活用できるような学びの場面を設定し、知識・技能の定着を図ることができた。 生徒自身が最適な学習方法を決定できるように、協同学習やワーク、スタディサプリなど、生徒が選択できる学習形態を増やし、生徒の主体的な学習を支援することができた。
思考・判断・表現	B	生徒が自分自身の考えをまとめ、発表したりする場面や、級友と意見を交わしながら学習を進める必要のあるような学習活動を設定し、さいたま市学習状況調査における無答率を下げることができた。

※評価　A 8割以上（達成）B 6割以上（おおむね達成）C 6割未満（あと一歩）

⑥ 次年度への課題と学力向上策

知識・技能	全体的には、基礎的・基本的な知識・技能の定着が図れた。しかし、個人差が大きいことから個別に必要な支援を講じていく必要がある。また、次年度の改善策としては、概念の必要性や意味の理解を深めるために、各教科の見方・考え方を働かせ、生徒同士が自らの考えを基に話し合う学びを全学年で重点的に取り組んでいく。
思考・判断・表現	来年度も継続して、主体的・対話的で深い学びに向けて授業改善に取り組む。また、各教科で学んだことが有機的に結びつくように、教科横断的な視点を取り入れた授業づくりを行っていく。

令和8年度版「学力向上ポートフォリオ（学校版）」【原山中学校】

①	今年度の目標と学力向上策
重点的に育成する資質・能力	(1)他者と協働して課題解決するために、自らの考えを適切に表現する資質・能力 (2)身に付けた知識・技能や既習事項を活用し、粘り強く試行錯誤する資質・能力
⇓	
実施する学力向上策【時期・頻度】	各教科等の授業において、生徒が自分自身の考えをまとめ、発表したりする場面や、級友と意見を交わしながら学習を進める必要のあるような学習活動を設定する。【適宜】 生徒自身が学習のゴールを意識して学習計画を立てたり、学習方法を決めたりする場面などの個別最適な学びの場面を設定し、必要感をもって取り組むことができるような授業づくりを行う。【適宜】

⑤	年度末評価	
学力向上策の実施状況	評価(※)	
⇓		
今年度の成果と次年度の課題		

※評価　A 8割以上（達成） B 6割以上（おおむね達成） C 6割未満（あと一歩）

②	全国学力・学習状況調査結果の分析
特徴的な結果	
⇓	
結果から考えられる児童生徒の実態	

④	さいたま市学習状況調査結果の分析
特徴的な結果	
⇓	
結果から考えられる児童生徒の実態	

③	中間評価	
学力向上策の実施状況	評価(※)	
⇓		
学力向上策の見直し		

※評価　A 8割以上（達成） B 6割以上（おおむね達成） C 6割未満（あと一歩）